

WTOC2013 (トレイル O 世界選手権) 2013 年 7 月 6-14 日 フィンランド・ヴォウカッティ

トレイルオリエンテーリング世界選手権は、中部フィンランド ヴォウカッティ VOUKATTI で一週間にわたる激戦を展開。参加 21 か国中わがニッポンはどう戦ったか・・・

WTOC2013 (トレイル O 世界選手権)
2013 年 7 月 6-14 日
フィンランド・ヴォウカッティ

二日間総合成績

出場 Open 52 名 Para 35 名

PreO Open:

1	Jari Turto	FIN	44p	110s
2	Martin Fredholm	SWE	44p	164.5s
3	Antti Rusanen	FIN	43p	66s
4	Lauri Kontkanen	FIN	43p	66s
5	Stig Gerdtman	SWE	43p	123.5s
6	Tomas Lestinsky	CZE	42p	60.5s
25	鈴木規弘	日本	38p	191.5s
33	木村治雄	日本	35p	255s
37	山口拓也	日本	34p	336.5s

Para Open

1	Jana Kostova	CZE	42p	141s
2	Pavel Dudik	CZE	39p	116.5
3	Soren Saxtorph	DEN	38p	96s
29	高橋義人	日本	23p	303s
30	高柳宣幸	日本	22p	410s
35	森 長三	日本	11p	465s



木と木の間

精鋭 8 人のサムライは・・・

今年のトレイル O 世界選手権 (WTOC) は、IOF の理念に沿って、フット O の世界選手権 (WOC) と同時、同場所で開催された。場所は FINLAND 中央部に近い VOUKATTI (ヴォウカッティイ)。

日本チームを構成するメンバーは、PreO オープン・クラスには WTOC 久々の

4 orienteering magazine 2013.12



このような林の中に見えるフラッグ(DAY1)

老練の鈴木規弘、メダル最短距離と目される木村治雄、ち密さの山口拓也。パラリンピック・クラスにはここ数年連続出場の高柳幸宣、森 長三に加え、前回の全日本選手権大会 (JTOC) P クラス優勝・JTOC 初出場の高橋義人。加えて、今年から本実施の新種目「テンポ TempO」競技には、タイム・コントロールでの回答時間が統計上国内最速の吉村年史。以上、8 名のサムライ・メンバーがメダル獲得をめざして現地入りした。

なお、チーム・マネジャー (TM) として小山太朗が、サブ TM として小泉辰喜が同行した。

21 か国から 93 名の競技者が

今年の参加国は 21 か国。スカンジナビア 4 国を中心とした欧州勢が圧倒的多数となるのはやむを得ないとして、英国、ロシア、独、伊の他に意外と中欧諸国が多い (チェコ、ウクライナ、クロアチア、エストニア、ハンガリー、ラトヴィア、リトアニア、ポーランドなど)。これらの中で近年進歩 (?) が著しいのはチェコ、ウクライナ、クロアチアで、北歐勢に迫りつつある。

米国は今年も 3 名の競技者を送ってきた。トレイル O の老舗、アイルラン

ドの参加が今年は無く、かつてのトレイル O 王国ベルギーもここ 10 年ばかり姿を見せていないのはさびしい限り。

アジアからは 3 か国・・・

われらアジア圏からは、我が国の他は香港 (2 名)、韓国 (1 名) といささか寂しく、昨年初めて顔を見せた中国・台湾 (チャイニーズ・タイペイ) の参加は今年は見られないのが非常に残念。フット O では存在感を示す カザフスタンも、その名前がトレイル O にはいまだ見ることができない。

P クラス競技人口の減少

今年も気付いたことだが、数年前に比べて移動障害を持つ競技者、パラリンピック・クラス (P クラス) の参加者が非常に少ないことだ。常に 3 名のフル・エントリーがあった英国 (GBR) は、昨年からわずか 1 名に減った、米国 (USA) に至っては、ここ数年 P クラスのエントリーが無い。

この理由は、以前から P クラスに該当するかどうかの障害程度の判定が非常に甘かった。健常者と変わらぬ行動をとれる者でも P クラスとして認定されていて不満が多出していた。IOF はその公平性を確保するために、3 年前に判定基準を厳しくしたのが P クラス競技



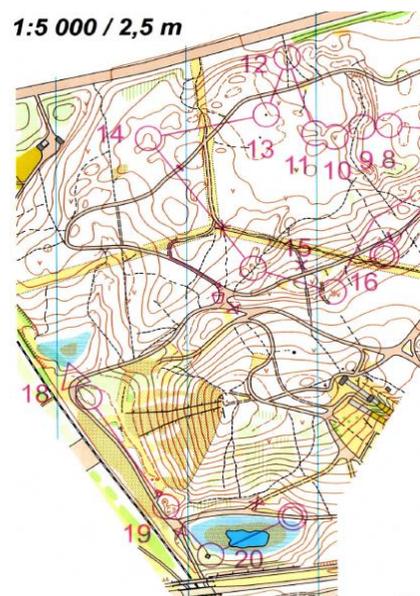
コントロールの様子



トレインの様子

読む長距離コントロールが多く、対応しきれなかった。(山口拓也)

1:5 000 / 2,5 m



DAY1 地図

DAY 2

DAY 1 と類似のテラインであったが、人工物や細かい地形の照合など、日本でも出されるような傾向の出題が多く、1 日目に比べてコントロールの難易度が若干下がり、そのため、Day1 よりは得点率は高くなった。しかし、これが秒差を争う熾烈な競争を生み、1 点のミス、数秒の遅れが勝敗に大きくひびくこととなった。私の成績についてだけ言うならば、2 日間の総合順位では 1 日目より下がってしまった。

(山口拓也)

国対抗チーム競技

DAY 2 は、国対抗チーム競技でもあった。少なくとも 1 名の P クラス競技者を含む同一国 3 名の事前登録者の成績の合計で決まる。

Sweden の優勝は人選の妙か。Finland は、チャンピオンとなった Jari を外した誤りが結果にモロに出た感じ。

Croatia はあと 1 点で優勝を逸した。

参加国 15 国

1	スウェーデン	59p	52sec
2	クロアチア	58p	47sec
3	デンマーク	58p	124sec
4	フィンランド	58p	130sec
5	ノルウェー	57p	35sec
6	リトアニア	57p	79.5sec
11	日本	47p	93sec

人口激減となった理由である。この IOF の決断は正しいと思うし、そうあるべきものであり、否定するものではないが、P クラスの競技人口があまりに減少してしまっただけでは、「障害を持つ者も、持たない者も分け隔てなく・・・」というトレイル 0 の理念にさか逆行するようにも思える。公平さを保ちつつ P クラスの人口を増やすための良いアイデアを諸氏はお持ちではないだろうか。(ちなみに日本では上記 3 人に加えて木島英登、軽森アキの 5 人が IOF から認定されている。)

競技テライン・コース

フィンランド特有の明るく比較的見通しの良い針葉樹林を巡るコースで、コントロール数は、DAY1=1.9Km 20c+4TC、DAY2=2.5Km 19c+2TC(チーム競技者はさらに TC がもうひとつこなすことになる)。

DAY1、DAY2 とも 2 コースで構成。コース途中で競技時間の対象とはならない「歩き」の区間があった(つまり、コ

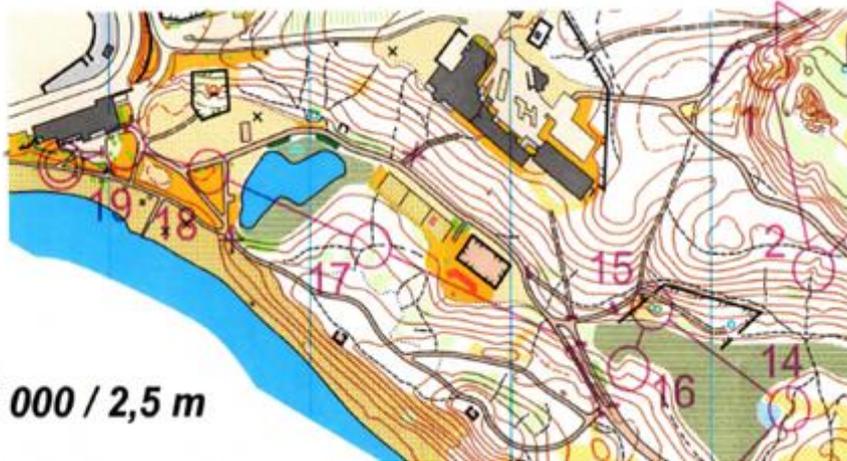
ースがふたつのパートに分かれていた)。また、比較的せまいエリアを使ったせいか、いったん足を踏み入ると、もう戻れない「一方通行(One Way)」箇所が散見されたし、小道についても全く立ち入ってはならないものと、ここから先には進んではならない・・・という二つの区分が使い分けられていた。

ルートはやわらかい砂地の部分が多く、そのうえ部分的には傾斜が急な所処々にあり、エスコートは付いていたものの車いす競技者は非常に苦労したと思われる。

コントロールはフィンランドの林だけあって特徴物を使用したものはきわめて少なく、沢、尾根、等高線の地形読みが多く、デリケートなセッティングであった。

DAY 1

松林のクロス・カントリースキー場を巡るコースという、日本ではほとんど見られないようなテラインで、細かい起伏が結構ある。緩斜面の等高線を



DAY2 地図とコースの一部

最終日は新種目「テンポ」

さて今年からWTOCに加わった選手権の新種目は「テンポ Temp0」。本誌でも今まで何度も紹介してきたが、簡単に言えば複数のタイム・コントロールばかりを、如何に早く(=短時間で)、かつ正しく回答するか…というトレイル0のいわばスプリント競技のようなもの。幾度かのトライアルを重ねて、いよいよ本年から選手権種目としてデビューした。

トレイル0にはめずらしく予選→決勝があり、まず予選に54名が挑戦し、上位24名が決勝へ進むことが出来る。

コース構成は 予選:1.8kmのルート上に8ステーション(TCの場所)、各ステーションでは3問ずつ課題をこなす。各ステーションでは3問に回答する累計時間と回答の正否が記録され、コース終了時点で合計トータル・タイム(誤回答については30秒のペナルティが加算される)によって順位が決まるという方法だ。「早く」しかも「正確に」回答しなくてはならない。また、通常のTCとは異なり、テンポではフラッグはA-Fの6本、しかも「Z(正解なし)コントロール」がある。

わが日本は、鈴木規弘、山口拓也に加えて、いよいよこの時を待っていた日本国内でのタイム・コントロールでの短時間回答記録者 吉村年史が加わった期待の3人。

競技結果は刻々とセンターのディスプレイに表示されてくる。トップのフィンランドのPinjaを抜く者がなかなか出てこない。

鈴木、吉村が決勝へ

予選が終わった。山口は奮闘むなしく34位となり、決勝進出の24名から

漏れてしまった。吉村16位、鈴木17位と続いて決勝へ。①のフィンランドは使用時間181秒+ペナ30秒=211秒(なんと24問中間違えたのが1問だけと驚異的。②)のフィンランドですら4問のペナ。)

⑩吉村 118.5s + Pena360s=478.5s

⑪鈴木 365.5s + Pena120s=485.5s
おわかりのように、吉村は早く答えたがペナが多く、鈴木は逆にペナは4と少なかったが、慎重に考えて回答時間を稼いでしまった…という結果となった。

決勝の結果は…

午後にはトレインをがらりと変えて決勝が行われた。選手たちはバス移動でジャンプ場のスタート地点に近い山の上へ。チーム・マネージャーもついてゆけない。だだ、ただ速報が入ってくるのを待つだけである。

決勝のコースは400mと短い。この中に5ステーションがあり、各ステーションでは3題ずつ、合計15課題にチャレンジする。

また、結果決定に当たっては、予選+決勝の合計13ステーションの合計で判定を行った。(2013, 2014の特例)

1	Pinja Makinen	FIN	354sec (324s + 30s)
2	Marit Wiksel	SWE	424sec (244s + 180s)
3	Lauri Konkanen	FIN	459sec (309s + 150s)
20	吉村年史	日本	886sec (226s + 660s)
21	鈴木規弘	日本	904.5sec (514.5s + 390s)

1位、2位はともに女性である。特に選手権者のPinjaは、他の種目には一切出場せず、テンポだけにしぼって出

場し、第一回の金メダルを引っさらってしまった。

よほどの自信があったのだろうか、この強さは、どこからきているのだろうか？ 合計39課題をこなして、ペナルティはわずか1か所である。まるで神業に思えるが、彼女はまぎれもなく人間であって神様ではない。…つまり、人間でもできるのだ。

おわりに

残念ながら、今回の流れを振り返ってみると、奮闘した選手諸君には申し訳なく厳しい言葉だが、WTOC2013においては日本惨敗したといつてもよいかもしれない。いや、そういえるだろう。負けるべくして負けたのだと思う。

では、なぜ悪かったのか？…各人それなりの高度のスキルはあるし、理論も持っている。それが通用しないのはなぜだろうか？

筆者の考えは、独断的かもしれないが、ヨーロッパを主とした諸外国での大会経験の無さ、少なさが大きな原因の一つではなからうかと思う。要するに、現地での場数を踏むことの少ないことだ。トレインの様子、特徴物、センターの描く地形の数々、さまざまなバラエティのあるコース・セッティング…そして大会が進行する雰囲気…

国内の大会に参加するように、気軽には国外の大会への参加が極めて難しいのは、筆者も十二分に理解できる。しかしWTOCにおいて好成績を上げようとするならば、海外大会への参加経験が絶対に必要だと思われる。欧州での「傾向と対策」を知るにはきわめて大切なことであると考えて。そして、それなりのエリート選手の育成が必要だ。「行くからには勝つ」という意識が、選手はもちろん、送り出す方にとっても非常に重要だと思う。

プレー、プレー ニッポン。来年はイタリアだ！

ご声援を頂きました皆さまに、心からお礼を申し上げます。ありがとうございました。

(こやま たろう)
WTOC2013 日本チーム マネージャー
JOAトレイル0委員会

WTOC2013に参加して

高橋義人(Pクラス)

今年初めて私はパラリンピック・クラス出場の資格をとりました。この資格の条件は2.5kmを40分以上要する脆弱な移動能力であることというもので、私は右膝半月板骨折と、中度の喘息病、さらに79歳9ヶ月という年齢で体力が弱く速く歩くことができません。この旨をIOFに医師の所見を添えて申請書を提出して認可されました。

今大会に参加するために、開催日の2日前に成田から飛行機で10時間、さらにヘルシンキから急行列車で8時間の移動は体力のない私にはかなりきつく、食欲はなくなり、両脚に痙攣を起こしギリギリの状態でした。もっぱら2日間現地休養に努めた結果、試合当日には体力は回復しました。

本戦第一日目は小雨が降り、しかもスタート前の地点で30分近く待たされてあまり良くないコンディションでしたが、何とかやってのけました。24問中14問正解(35人中25位)でまずまずの出来でした。

比較的易しい第12コントロールに続き第13コントロールもチョー易しいと安易に思い見事にひっかかりました。

フラッグは目立つ岩につけられていて、私は迷わずCCのB欄にパンチ。後で正解の位置にフラッグのついていない別の岩があるのに気がつきました。

重ねてもう一つ、第20コントロールは湿地の奥の暗がりにやっと見える2つのフラッグのうち、左側のフラッグが正解に違いないと確信してA欄にパンチしてしまった。しかし、後日に立入禁止のテープを越えて正解位置とおぼしきあたりに近づき、よく見ると草に見え隠れして人工物(小小屋)が確かにあり、それはDP付近からは殆ど見えないものであった。DP位置からその人工物の方向とフラッグが置かれていた方向はわずかに違っており、上位入賞者の殆どが”正解なし”を当てていた。

第二日目は快晴、適温の絶好のコンディション。私は今日のこのレースに国対抗チーム競争の一員として選ばれたので張り切っている。だが疲れが少し出ているので、スタート前にリポビタンDを一本飲んで出場。勢い込んでいるせいか、最初のTCを2つとも、そして続けて第1と第3コントロールもはずしてしまう。以降は第14コントロールまで好調と信じて進む。しかし、第15番を安易なポストと思い、まとも

見事に罠にかかってしまった。そのこのフラッグは正解の位置より50m以上離れた類似の特徴物につけられていた。気をつけていたのに、前日と同じミスをしたのである。その後、そんなに難しいと思えない第16~19番を連続してミスしてしまう。意識していなかったが、微妙に冷静さを欠いていた。チーム競争のための最後のTCは2問とも正解した。TCを含めて23問中正解は10問。面目ない成績に終わった。

それにしても、上位8位までのレベルの高さには恐れ入っている。彼らはほぼ完璧だ。私はこの2日間コースランナーの思いどおりにあしらわれた。私には技術面もさながら、精神面の鍛錬も必要と思われる。

この10日間苦しい日の連続であったが、久しぶりに充実した日々でもありました。ご支援ありがとうございました。

(高橋義人)

